

「教会なのに」 使徒言行録 6：1～7

I 導入部

おはようございます。6月の第一日曜日を迎えました。今日も、愛する皆さんと心を合わせて、私たちの救い主イエス・キリスト様を賛美し、礼拝できますことを感謝致します。

昨日は、ユーオディア創立30周年の記念感謝会で、大きな恵みをいただきました。賛美のすばらしさに改めて感動しました。これからも、ユーオディアの働きのために、お祈りし、おささげしたいと思います。その後、明治学院バッハ・アカデミー・バッハ・カンタータ演奏会に行きました。保坂兄と田宮姉が聖歌隊として参加されており、幸いなひと時を過ごすことができました。

私たちは、今日いろいろな人々と共に礼拝を守っています。同じ会堂の中でも、暑いと感じる人、寒いと感じる人、ちょうど良いと感じる人と様々です。今日から司会者と説教者は、ノーネクタイ、ノースーツというクールビズで礼拝を行っています。暑いのため、短パンとTシャツでいいと思う人もいるでしょうし、いや、礼拝なのだから、背広とネクタイ着用と思っている人もいるかも知れません。私は、青葉台ではノーネクタイ、ノースーツですが、他の教会に行けば、スーツ、ネクタイですから、とても暑苦しく、窮屈です。汗ダラダラで説教をします。いじめです。

同じ土地に住み、同じ日本語を話す日本人でも、生まれた場所が違い、時代が違い、今までの経験が違うといろいろな物事の考え方や捉え方は違います。昨日、リサイクルバザーがありました。本当にご苦労さまでした。バザーの持ち方でもいろいろな意見があるでしょう。みんな違ってみんないいのですが、その違いをなかなかお互いに理解できないで、問題が起こる、争いになる。分裂が起こるといことが現実にあるのです。

今日は、使徒言行録6章1節から7節を通して、「教会なのに」という題でお話し致します。自分の罪を正直に認め、救い主イエス様を信じたクリスチャンに、教会に争いなんか無い！と思われるのでしょうか。聖霊の導きで教会が誕生したエルサレム教会、使徒たちを通して著しい、み業が示され、さらに、多くの人々が救われたエルサレム教会でしたが、問題が起こったのです。その問題をどのように解決し、さらなる祝福へと導かれたのかを共に見させていただき、争いや問題が起こった時に、聖書の教えに従っていきたいと思うのです。

II 本論部

一、問題は問題ではない

ペンテコステの日、聖霊が降り、イエス様の証し人として力強く証ししたペトロの説教

を通して3000人の人々が救われ、洗礼を受け、教会が誕生しました。イエス様の弟子たちを中心に、日々の糧を共有し、心を合わせ賛美をし、聖餐を守っていました。先週は、ペトロとヨハネを通しての奇跡的な働きを見ました。生まれながらに足の不自由な男を癒したことを通して、ペトロとヨハネは議会で取り調べを受け、脅されることとなりますが、さらにイエス様を力強く証しました。

信じた者の群れは持ち物を共有して、貧しい人々を助けましたが、神を欺く者もおりました。使徒たちは、さらに力強いしるしと不思議な業を行い、多くの人々が、さらにイエス様を信じ、信者の数は増えていきました。

そして、使徒たちに対する迫害が起りましたが、ペトロは恐れることなくイエス様を証したのです。弟子たちは、イエス様の名のゆえに辱められることを喜び、福音を伝えたのです。

エルサレム教会は、ユダヤ人が中心の教会でした。しかし、ヘブライ語を話すユダヤ人とギリシャ語を話すユダヤ人の間で問題が起こったのです。外部からの迫害ではなくて、教会の内部において争いが起こったのです。ギリシャ語を話すユダヤ人は、ヘレニストと呼ばれ、彼らは、パレスチナから世界中に離散していたユダヤ人であり、様々な異国の異文化に接して生きていた人々で、ユダヤに住むユダヤ人とは、物事の考え方や捉え方において、随分違っていたのだと思うのです。

日本でも、関西に住む人と関東に住む人は、考え方も違います。東北や九州、北海道、沖縄になれば、また、習慣も随分違うのではないのでしょうか。県民ショウという番組がありますが、同じ食べ物でも食べ方が違ったり、他の地方の人々がビックリするような食べ方もあったりして、とても参考になります。狭い日本の中だけでも、そのような違いがあるのですから、世界中に離散していたヘレニストと呼ばれ、ギリシャ語を話すユダヤ人は、ヘブライ語を話す生粋のユダヤ人とは、いろいろな違いがあったことが考えられます。

ここで問題が起こりました。その背景には、弟子の数が増えたことでした。人数が少ない時は家庭的な教会で、お互いにメンバーの数や様子がわかるので、配慮しやすい面があります。けれども、著しく弟子の数が増えて行ったエルサレム教会は、数の増加と人々への配慮が並行して進んでいかなかったのです。弟子たちの目の届かない部分が多くできて、その結果、一人ひとりに寄り添い、配慮できなくなったのだと思うのです。

そのような中で、ギリシャ語を話すユダヤ人からヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出たのです。人が集まる所には、問題が起こります。それは、クリスチャンであっても、教会であっても、人が集まる所には、かけ違いや、足りない部分、見えない部分があり、不満やつぶやきが起こるのです。問題があるから教会ではない。問題がないから今日秋であるということではないのです。聖霊を通して、神様が召し集められたところに教会がある、と榎本保郎先生は、新約聖書一日一章で語っておられます。

二、解決は第一にやることを第一にする

ヘレニスト、外国で生活し、ギリシャ語を話すユダヤ人たちは、生涯の最後に故郷に帰ってくるということがあったようです。聖地エルサレムで死にたいと願ったようです。ま

た、夫に先立たれたやもめと言われる女性たちは、経済的にも社会的にも弱い立場であり、教会は特に彼女たちを支えていたのだと思うのです。その、最も弱い立場で、生涯の終わりに外国からユダヤ、故郷に帰ってきたやもめを教会は特に支えなければならないのに、そのヘレニストのやもめたちが、日々の配給で軽んじられているということが起こったのです。

私たちは、他の人々と同等にされていないと感じると不満や憤りが生まれます。特に、自分に関係のある弱い立場の人が、あしらわれたり、軽く扱われたり、無視されると憤慨します。ギリシャ語を話すヘレニストと呼ばれた人々は、人生の最後を聖地エルサレムで過ごしたいという気持ちでいるやもめたちが、日々の配給で軽んじられていることに腹を立てました。異議を申し立てたのです。詳訳聖書には、「**毎日の援助分配にあたって、見過ごされ、(おろそかにされた) ために**」とあります。

私たちの人生においては、家庭生活、社会生活においても、信仰生活においても問題は起こります。その問題が起こった時に、どのように対処するのが大切だと思います。

エルサレム教会は、苦情が出た時、どのように取り組んだのでしょうか。まず、2節にあるように、「**十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。**」とありますように、ギリシャ語を話すユダヤ人からの苦情をしっかりと受け止めたのでした。無視したり、権力で抑え込んだり、うやむやにはしませんでした。教会全体のこととして、この問題をとらえたのです。弟子というのは、信徒の方々ということです。この問題は、特定の人々だけが解決すればいいというのではなく、教会全体で考えたのです。

2節の後半には、「**わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。**」とあります。新改訳聖書には、「**神のことばを後回しにして**」とあります。口語訳聖書には、「**神の言をさしおいて**」とあります。詳訳聖書には、「**私たちが食卓に仕える(食物の分配を監督する)ために神のことば(説教)をやめる(おろそかにする)ことはよくありません。**」とあります。

本来、イエス様の十二弟子は、神様の言葉を語る、伝えるという大切な使命がありました。ペトロは、ペンテコステの日、説教を語り、多くの人々が罪を悔い改めて、イエス様を救い主と信じて、洗礼を受けたのです。ところが、救われる人があまりにも多くなると、当然、貧しい人々、やもめといわれる立場の弱い人々も多く救われ、信じた人々の群れは持ち物を共有し、多く与えられた人々はささげ、特に貧しい人々のために食事の配給をし、人手不足もあったのでしょうか。12弟子たちは、財産やお金の管理、つまり会計係や食事の献立、配給の量や順序なども一手に引き受けて仕えていたようです。ですから、12弟子たちは、本来自分たちが優先すべき事柄、神の言葉を第一に語ることに、第一のものを第一にと考えたのでした。そして、今まで12弟子がしていた、会計や食事の配給等を他の人々にまかせることにしたのです。

問題というものは、起こるべくして起こるものです。必ず原因があります。弟子たちは、この食事の配給の、根本問題は、配給の仕方や量、その方法というのではなく、神の言葉が大切にされていない事だとわかったのです。そして、その手立てを考えたのでした。

今、私たちの信仰生活に問題や課題があるとすれば、第一のものを第一にしていな

いということがあるのかも知れません。その解決の近道は、第一のものを第一にすることだと思ふのです。

三、神様を信頼し、イエス様に期待する

3節を共に読みましょう。「それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。」弟子たちが、今までにしていたことを委ねるために7人を選ぶことにしたのです。その選択の方法は、「霊と知恵に満ちた評判の良い人」ということでした。

霊に満ちた人とは、聖霊に、イエス様に、その生活のすべて、隅々にまで支配されている人と言えるでしょうか。教会に来ている時だけ、礼拝している時、祈っている時、聖書を読んでいる時、奉仕をしている時だけ、聖霊に満たされている人というのではなくて、この世の中であって、生活の全てに聖霊に取り扱われる人なのです。自分の思いや考えを優先して生きるのではなく、聖霊が教え導く神様の思いを優先する人です。パウロという人は、「だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」と言いました。

知恵に満ちた人とは、聖霊に満たされた結果としての実を持つ人。知識がある。知識が豊富であるというのとは違います。聖書には、「知識は人を高ぶらせる」とあります。ある先生は、知恵のある人というのは、この場合、日常的な物事を処理できる人と言っておられます。

評判の良い人とは、誰の目にも認められる人。この場合には、ギリシャ語を話す人々の話を聞ける人、その人の痛みや悲しみを理解し、寄り添える人とある先生は表現しました。そして、イエス様を信じる信仰を持つ人。どのようなマイナスの状態にあって、現実、現状だけにとらわれず、どこまでも、聖霊に、イエスさまに信頼して、自分のできることを喜んで全うする人だと思ふのです。このような条件で7人を選びました。すると、この選ばれた7人は、7人ともギリシャ語を話すヘレニストの人々だったのです。

12弟子たちは、配給の問題だから、物質や配給にたけた人を選んだのではありませんでした。食事の配給の働きのためにすぐれた能力、経験、素質を持つ人々を選んだのではなかったのです。ただ、「“霊”と知恵に満ちた評判の良い人」を選んだのです。ふさわしい人々を選んで、12弟子たちは、「祈りと御言葉の奉仕に専念」したのです。すると、7節です。「こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った。」 「“霊”と知恵に満ちた評判の良い人」を選び食事の世話をお願いし、12弟子たちは、彼らが本来すべき働き、「祈りと御言葉の奉仕に専念」して、第一のものを第一にしたら、神の言葉が教会に内側だけにとどまらず、外部へも広がり、イエス様を信じる人々がさらに起こされ、イエス様に対して、キリスト教会に敵対していた祭司たちが信仰に入ったのです。

今回の問題は、誰かの罪や不正といったものが原因ではありませんでした。第一のものを第一にできていないということに原因があったのです。日本体育大学の陸上部の監督は、「**当たり前**のことを**当たり前**にやる」ということをモットーに、箱根駅伝で日本体育大学

を優勝に導いたのでした。

私たちは、イエス・キリスト様を信じる信仰者として、神様の愛、私たちの罪を赦すために十字架にまでかかり、その尊い血を流し、命まで投げ出し、ささげられたイエス様の愛を知った者として、キリスト者として、どのような痛みや苦しみを経験しようとも、イエス様が共におられ、必ず助け導いて下さると信じて、期待して、やるべきこと、聖書に触れ、祈り、礼拝や祈祷会を守り、隣人に仕えていきたいと思うのです。

Ⅲ結論部

モーセは、エジプトで奴隷状態にあったイスラエルの人々をカナンの地に導くために立てられた指導者でした。40年の間、モーセは人々と向かい合いました。ある時、しゅうとのエトロがモーセの所に来た時、モーセが朝から晩まで、イスラエルの人々の話を聞き、苦情を聞きという状態を見た時、よくないと注意し、モーセが一人でこの任を負うのではなくて、10人、50人、100人、1000人の上に人を立てて、小さな事件はその人々に任せ、大きな、重要な事柄をモーセが担当するようにとアドバイスしました。モーセはエトロの言うことを聞き、そのように実行して、モーセも民も守られたのでした。

日本の教会の牧師先生は、祈りとみことばの奉仕以上に多くの事柄を担当しています。ですから、疲れているというのが現実です。信徒の方々からいろいろな不満が噴出し、教会形成に赤信号がともっているのが現実なのです。

幸いに、青葉台教会は、牧師が祈りとみ言葉に専念できるように、信徒の皆さんが、多くの働きをカバーして下さり、第一のものを第一にできているのだと思います。祈りとみ言葉のための奉仕者として、塚本先生や岩淵兄が与えられていることは、さらなる幸いだと思います。

イエス・キリスト様が中心となる教会、神様の霊が宿る教会であっても、イエス様を救い主と信じるクリスチャンであっても、弱さや問題はあります。教会なのに、いろいろな問題がある。クリスチャンのくせになどなど。そこには、罪や弱さがあるのです。その罪や弱さを認めて、お互いの問題を見つめつつも、互いに神様に愛されている存在として、相手を愛するものでありたいと思うのです。

昨日の、ユーオディア創立30周年記念感謝会で、小坂忠先生がお話ししておられました。小坂先生はポップスという音楽のジャンルなのではないでしょうか。ポップスの方々は、クラシックのジャンルの方々には、引け目があり、クラシックの方々は、ちょっと上から目線でポップスを見る傾向があった。その2つの音楽のジャンルが一緒に、手を携えて歩むことができたことを感謝しておられました。「君は素晴らしい」という賛美をされましたが、私が20歳の頃、ミクタムのコンサートで励まされ、恵まれたことを思い出しました。40年前です。小坂先生のギターと背後で6名のユーオディアアンサンブルの方々のコラボの賛美に感動しました。違うジャンル、自分と違う性質のものが一つになる。それは、神様が私たちに求めておられることだと思うのです。

私たちは、この週も意見の違う人、性格の合わない人、日本人以外の人と関わるかも知れません。しかし、そこに主にある一致をもって歩みたいと思うのです。